

炎炎ノHERO academia

ラブダイバー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これはありしやに惚れてた少年が、女性ヒーローとしてAqoursを守るお話。

何いつてるかわからない

世界観のお話

- ・ スクスト時空
  - ・ ヒロアカ時軸
  - ・ 炎炎ノ消防隊の可能性
  - ・ Aqoursの可能性
  - ・ グランブルーファンタジーの可能性
- みなさん、こんにちWAG！ラブダイバーです。  
ありしやの炎炎ノ消防隊コスを見て思いついたssです。  
処女作なので大目に見てくださいいな。(ノ；| |)ノドゲザー

## 目次

EP1*英雄高校入学前	
突然始まるプロローグ	1
平行世界《パラレルワールド》に來ました	5
たぶん俺はこの世界が本来の居場所なんだと思う	11
この約束 いつまでも有効だよ	15
自分を超越することに ただ一生懸命	22
ヒミコとのちよつとした一幕	25
EP2*1学期	
これが雄英普通科アカデミー!	28
3週間で勝負	33
最近、物騒なこと起こってるから	38
《覚醒》	42
全てを焦がす力に	47
『決着』	51
EP other	
日常編 猫ごっこ	56
EP extraction	
—観測者—のノート*陸奥 火賀梨 編	60
松浦果南 誕生日	62
国木田花丸 誕生日	66

## EP1\*英雄高校入学前 突然始まるプロローグ

「ああ…もうこんな時間か……」

少年はAM3:40と表示された画面を見た後、手元にあるマンガを適当に積み上げた。読んでいたマンガは「炎炎ノ消防隊」。なぜ彼がこのマンガを読んでいたのかというところ

「…ありしやがコスプレしていた作品だったからどんな内容なのか気になってたけど、なかなか面白い」

(特に主人公の森羅がカースト下位グループでも、物語の最初からチート並みの強さを持ってないところがポイントが高い。最弱無敗の《没落皇子》も落第騎士の《無冠の剣王》も努力の賜物とはいえ、チカラの成長を見たかった。もちろん、両作品は好きだけれども。それでも青臭い成長があっても良かったと思う。)

青臭い、といえばミッドナイトの口癖の一つだったな。ヒロアカって個性の性能と弱点のバランスが絶妙だよな。一番ツボなのはレイザーヘッド。彼の個性は絶対強個性の部類に入るのに…ドライアイってwネタにしかなれなくなったw。個性の使い方次第で強くなったり、弱くなったり。頭の柔らかさが一番必要な作品だよなヒロアカって。そうなるか……)

一人妄想モードに入っていく彼。一人で考えることにおいては緑谷にひけをとらないほど。

すると突然、大音量で元気全開DAYDAYDAYが流れる。

(光って闇に強くなってきているけど、闇も光に強いはずだよな。相互関係になってるゲームがあるわ、うえあえ!?!…なんだ、活動開始時間4時になったのか)

(じゃあ、いつも通りルーティーンロケティンしていくか。…眠い。)

実を言うと三徹目なのである

「五分ぐらいで片付くし、少しだけ目を閉じてもいいよな。うん、おやすみ。」

そう言っつていつも抱き枕にしているMJNNの黒澤ダイヤを抱きしめて目を閉じた

………

………

………

………

………

―プツン―

………

………

………

彼の意識がゆっくりと覚醒していく

「…ん。結構寝ちやったかな…いや、寝てたカナン？」

彼女は寝惚け眼をこすりながら部屋を見渡す。今まさに燃えている部屋を。

「……………つか、ココロコナノオオオオ!!?アイエエエエ!??ナンデ、ドウシテ☒」

(お、おとおおお落ち着けもち着けお餅つけ!…………。俺は確か自分の部屋で目を閉じただけだよな?寝てしまったかもしれないけどさ?と、とりあえず今は現状把握だ。一つ、俺は今5歳くらいの女の子になっっている。二つ、見知らぬ部屋が燃えている。この二つ。…………なんで女の子?いや、それよりここにいる理由と原因!今思いつくものは、

①入れ替わり

②憑依

③転生

④夢

の4つだな。

まず入れ替わり。入れ替わりの対象になるのは大方同じ年齢で深い関係を持った人達に限定されるはず。「君の名は」然り「ココロコネクト」然り。だから入れ替わりである可能性は低い。コンナオンナノ

コシラナイモン。次、憑依の方だが俺が死ぬのが前提じゃないか？三徹の疲労で死んでしまったのか？そしたらなんで女の子の体？……俺は、ロリコンではない……はず。……じ、じゃあ転生か？……この可能性も低いと思うな。転生モノの話は大体が真つ暗い空間や白い部屋の中から始まると相場が決まっている。その中で前世の記憶を保有して生まれ変わるはず。ならどうしてその前後の記憶がない？となると、

#### ④夢

が一番可能性が高いよなあ。夢なら燃えている部屋の説明もしやすいし。夢を見る理由は記憶を整理する為だったよな。直前まで炎ノ消防隊を読んだからな、こういうシーンあったし。……眼が覚めるまでどうするか。

別の場所に移動しようとして部屋から出ると階段があった

「…行ってみるか」

(寝る前に読んだ炎炎ノ消防隊の幼少シンラもこんな感じだったのかな?)

階段を一段一段、慎重に降りていく

(不思議と熱くないな。夢だからか?……ん?誰かいるな。)

階段を下りきると火の手ではつきりは見えないがツノのようなものが生えているガタイのいい生物がいた

(……へ?焔ビトじゃね?アレ)

「ここには人はいないな!ーよーし上の方に行ってみるか!しかし炎が厄介だな。ンーツ、TEXAS SMASH!!?」broooooow

!

(チョットオオオオオ!??火がこっちにくるんですけどおおお)

⊠

「うわああああああああ!!?」

「ん?しまった!今助けるっ!」ダッ

ガシッ

「ほえ?」

(なんで、俺は、捕まっている?)

「もう心配ないぞ少女。なんたって…私が来たっ！」

## 平行世界《パラレルワールド》に来ました

「さて、君のことを教えてくれるかい？」

俺は今、警察官から質問を受けている。俺の事（少女の方）について知りたいらしい。

「…うん」

（といつても答えは一つしかないんだけどさ）

「名前は？」

「わかんないです」

「親御さんは？」

「わかんないです」

「お父さんの仕事とかは？」

「わかんないです」

「……………」

「……………」

（わかる訳ないだろ。俺の事なら兎も角、この身体の記憶については一切知らないんだから）

「そ、それじゃあ、何か覚えてることはないかい？」

「おぼえてること？うーん……………。あ」

（一応俺が知っているこの身体の記憶って言ったらコレしかないか）

「ゆーかいされました。変な髪の毛のおじさんに。あ、あのおじさんです。」

（俺を家から連れ出した人がこつちをチラチラ見てるよ…怖っ）

「誘拐だつて?!? 一体どんな人…つてオールマイトさん?!?」

「H A H A H A! どうしたんだい? みんなしてこつちを見るなんて。よっぽど私がここにいないことが不思議かい? …ん?なんでそんな顔をしているんだい?」

「オールマイトさん、この子を誘拐したって本当ですか?」

「なんだい?いきなりそんな事を聞いて」

「いえ、この子がオールマイトさんに誘拐されたって言ったので」

「私が誘拐?そんなことするわけないじゃないか! H A H A H A!」



「そうですよねー、といつかなんてここに来たんですか？」

「ああ、この少女の家から何故か焼けた跡がない金庫が出てきたからね、それを少女に確認しに来たんだよ。持ち物は持ち主に渡るのが一番だからねー」

「あー、……確かにそうですけど、この女の子の物じゃなかったら、やってることは火事場泥棒と同じですからね。それ」

「うっ……つ、次からは気をつけるよ」

それじゃあ、と前置きして警官が聞いてきた

「一つ聞きたいんだけど、この金庫は君か君の家族の物かい？」

「うーん、多分そうかもです」

「これ、開けることできるかい？」

「わかんないです」

「そうだよねー。……オールマイトさん、ほかに何か無かったんですか？」

（金庫のこと聞いただけ聞いて、結局は無視ですか。）

まあ、いいんですけど、と思いつながら金庫を触っていると……

カシュツ

と音がした

（開いた……んだな。中身中身、つと）

入っていたものはノート一冊と独特な形をした鍔つばの刀の柄つかが二つ、その柄を収納するためのウエストポーチが一つ、そして鬼灯ほおずきの実の形をしたペンダントが一つ入っていた

（ノートか……何が書かれているんだ？）

とりあえず、表紙をめくってみる

『このノートを読んでいるあなたは、陸奥 火賀梨（みちのく かり）という女の子で、

あなたの個性は「火喰い」。周りの炎を吸収して操る、

といった内容の個性を持っている。

この事を理解しているのであればここで読むのをやめなさい

この事を理解したのならばこの続きを読みなさい

この事を理解できないのであれば落ち着いてからもう一度読み直

しなさい

また、このノートは陸奥 火賀梨のみが読むことを勧める』

(……は？理解しているなら読むな、理解したなら読め、理解できないなら読み返せ。……さっぱり分からん。理解しているなら読んでもかまわないはずだよな？自分の事なんだし……。まあ、俺は理解した側になるんだよな。今読んで分かったからな。)

次のページをめくってみる

『このページを読んでいるということは、

あなたは陸奥 火賀梨ではなかったという事になる。

この事を理解したのならばこの続きを読みなさい

この事を理解できないのであれば読むのをやめなさい』

(……あー、そういう事ね。だから「理解しているのであれば読むな」って書いてあったわけだ。)

(とりあえず分かった事を喋っとくか。)

「あー？」

「ん、少女よどうしたんだい？」

「金庫開きました、けど」

「え、マジ？」

「はい」

「中には何が入っていたんだい？」

「えと、コレです」

ノート以外の道具を見せた。因みにノートは服の下に隠してある。

「刀の柄とウエストポーチ、あとペンダントだね」

「ポーチにはK a g a r i M i t i n o k uと刺繍が入ってるね」

「かがり みちのく、だね。ちよつとオールマイトさんと待っててくれるかい？」

「わかりました」

警察官はパソコンの方に向かっていった。おそらく戸籍情報を確認するんだろう。

「あー、みちのく少女？さつきはゴメンね？」

「さつき、ですか？」

「うん、君を危険なめにあわせてしまったでしょ？」

「ケガ、してないので大丈夫です」

「そ、そうかい」

「はい」

「……………」

「……………」

（気まずい…）

かたや、救うべき人を傷つけそうになったヒーロー。かたや、N.O.ヒーローを誘拐犯扱いにした少女。どっちも話を切り出すことができないでいた。

（俺は記憶がないってことになってるしな。実際こっちの記憶はないからな）

（みちのく少女は記憶喪失の疑いがあるから、無闇に話を振れないぞ）  
「あの、オールマイトさん？ここはどこなんですか？」

「え、ここかい？ここは警察署っていうところだよ、みちのく少女」  
「そうじゃなくて、この場所はどこなんですか？」

「あ、あー！ここの地名だね。ここら辺は静岡の内浦っていうところだよ」

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして」

「……………」

「……………」

（話が続かない…）

「二人ともー確認とれたよーってなんなんですかこの空気!?!？」

「ああ！お帰り！待ってたんだよ！…それでどうだったんだい？」

「はい。この女の子は陸奥 火賀梨ちゃん6才、個性届も出してあつて個性は『火喰い』です。」

「その他の情報は？」

「それが…」

そう言い淀むと警察官はこっちを見てきた

その視線を見てオールマイトも気づいたようだった

(こつちを見てきた、つてことは両親は亡くなったのか捕まっているのか、いずれにせよ会えないつてことか。なんとも言えない雰囲気になっちゃってるよー。地雷踏みすぎじゃあないですかー?)

心の中でため息を吐きながら、こう切り出した

「私は、これからどうしたらいいんですか?」

「お父さんやお母さんと会えないんですね。お家もなくなっちゃったから…」

「……………」

「えーとね火賀梨ちゃん、心配しなくても大丈夫だよ。お父さんとお母さんにはその内会えるとおもうし、お家の方も僕たちでなんとかするよ。だから大丈夫!…オールマイトさんからも何か言ってくささい」

「えっ!?…陸奥少女。この警察官の人も言っている通り心配しなくても大丈夫さ!何かあったら私が駆けつけて君を守ろうではないか! H A H H A H A」

「ありがとうございます」

「どういたしました。そしたら火賀梨ちゃん、あつちの机の方で待っていてくれるかい?」

「はい、わかりました」

「オールマイトさんはこれからどうするんですか?」

「この事件のヴィランは捕まえたから、パトロールにでも行ってくるよ」

そう言つてオールマイトは警察署を後にした

(…………さて、ノートの内容を続きますか。)

……………

……………

……………

(ソリティア、1200点超えた)

もうノートの内容は全部読んだので、机の上にあったパソコンでソリティアをして遊んでいた

(ソリティア飽きたし、次はマインスイーパーで遊ぼうかな)

「火賀梨ちゃん、ちよつといいかな？」

「はい、なんですか？（ちよつとびつくりしたわ）」

「君の住むところが決まったよ」

「どこなんですか？」

「ここだよ」

そう言っつて差し出した紙には

— 児童保護施設 A q o u r s —

と書いてあった

たぶん俺はこの世界が本来の居場所なんだと思う

船の歌 作詞：陸奥 火賀梨

プカリぷかぷか浮いている、船にゆらゆら揺られたら、あつという間に島に着く。俺は絶賛船酔い中

火賀梨は今、警察の方と一緒に船に乗って『児童保護施設 A q o u r s』に向かつてる最中

なのだが……

(うえええええ、気持ち悪い……だれか、助けて……)

心の中でそう思いながら「ちよつと待っててー！」なんて自答も出さない程余裕が無い。

というか、ネタで花陽ちゃんのコール&レスポンスを言った訳ではない。彼女の心の叫びである。心がそう叫びたがっている。

そういうしているうちに船着き場に到着するらしい。

が、今の火賀梨にはどうでも良かった

(ああ、もう、ダメ……)「吐きそう……」

「火賀梨ちゃん、大丈夫かい？歩ける？」

「無理……です……」

「そうか……。ちよつとだけ失礼するよ」

「はい？……あああああああ!!?!!?」

(飛び降りおった！この人、警官なのに船着ける前に俺を抱えて飛び降りたよ!!?)

ダンツ、と船を勢いよく蹴って10mほどの距離を俺を抱えて跳んだ。俺の具合が悪化しないよう、跳躍中頭が振れないよう気をつけられたり、着地の震動が来ないように降りてくれたりした。

(……そこらへんは紳士だなあ)

「ふう、思わず飛び降りてしまったけど、大丈夫だった？」

「はい……なんとか……というか……飛び降りても、良かったんですか？」

「いや、ダメだよ？」

「じゃあ、なして……」

「あの船の中で吐かれたら、って言うよりあの船を汚したら凄く怒られるんだよね…凄く」

「…そうなんですか?」

「ウソだよ?」

「え?」

「本音をいうと、処理が面倒」

「…そうですか」

上がった好感が台無しじゃん、そう思った火賀梨であった。

船着場から歩いて15分、途中《かえる館》やペンギンがいるプールを横目に見ながら、島の反対側にある和風の建物「児童保護施設 Aqours」に到着した

「着いたよ。ここが火賀梨ちゃんの新しいお家、Aqoursだよ」  
「ほえー、(成る程、場所は淡島っぽいな。施設は船着場の裏にあるのか。建物の外装は大川家と安田屋旅館を足して割って2した感じかな。ただ雰囲気は淡島ホテルに近いんだよなあ。マリーの所為か?)」

少し考え事していると建物から二人の女性が出てきた。

1人はバターブロンドで三つ編みにした横髪をカチューシャのように通して、毛先を輪つかにしている、見るからに天真爛漫という言葉が似合うフランス系アメリカ人とのハーフ。

もう1人は黒髪で前髪後髪とも綺麗に切り揃えられ日本人形のような印象を抱かせながらも、エメラルドの朗らかさに凛々しさを併せ持つ目、可愛い旋毛、ハリのある唇、透き通るような肌に、風になびいた髪と右の艶ボクロがオトナの妖艶な雰囲気醸し出している、まさにザ・和風美人。

「全く、何でトップの貴女が大事な仕事を放り出すのですか?」

「だって〜寝ていたいもの、まだ6時よ?」

「もう6時ですわ!」

(典型的な返し方)

「典型的な返し方ですね。コントですか? 黒澤ダイヤさん、小原鞠莉

さん」

(…全く躊躇なく、躊躇いなく言ったよこの人)

「ゴホン、おはようございます多摩川さん。そちらの子が、今回Aqoursで預からせていただく陸奥 火賀梨さんですね」

「シャイニー！ワタシは小原鞠莉よ。Aqoursに入ったならばキラキラでシャイニングな毎日を貴女に贈るわ♪」

「私は黒澤ダイヤです。火賀梨さん、貴女の事は多摩川さんからお聞きしました。これからはこのAqoursが貴女の居場所になります。心身共に健やかに過ごしてください」

「…はい、陸奥 火賀梨です。これから宜しくお願いします。(待って待って待って、これって夢？マリーとダイヤが俺の親代わり!?？いや、Aqoursって施設名だから他の7人も先生なのか？だとしたら最高じゃねーか!…いやでも施設があるってことは俺より前からいる子供達がいるのか?…羨ましいなあ)」

「火賀梨さんのこと、よろしくお願いしますね。ダイヤさん、鞠莉さん」

そう言って多摩川は船着き場に鼻歌を歌いながら歩いて行った

「それじゃ早速Aqoursの中を案内するわ!マリーについていらっしやーい♪」

「鞠莉さん!静かにお願いしますわ!」

鞠莉、ダイヤの案内でAqoursの中を見て回った。まずは一階。一階は食堂、大広間、浴場、事務室。次に二階。二階は子供や職員の部屋、全部で15部屋あった。最後に外。外には滑り台やシーソーなどの遊具や、25mプール、噴水や盆栽などが置いてあった。「キレイな景色が見える場所があるの。ついてきてくれる?」と鞠莉に言われて淡島神社まで歩かされた。

「ちよ、ちよっと休憩を…」

「あら?疲れちゃったかしら」

「当たり前ですわ!なぜ火賀梨さんを神社まで連れてきたのですか!」

「この淡島のシャイニーな部分を見せたかったのよ」



「…それならべつに今日で無くても構わなかったのではなくて？」  
「今日だからこそよ。ダイヤなら…わかるでしょう？」

「!…だとしても、流石にいきなり過ぎますわ!火賀梨さんのことをもつと考えて行動してくださいな!」

「Oh!ダイヤが鬼になったく♪カガリ、逃げるわよ?捕まったらアウトデース!」ダツ!!?

「お・ま・ち・な・さーい!!?」ダツ!!?

「お、置いて、いけない、で…」

少女帰還中…:現在玄関前から大広間へ移動

「ゼエ…ハア………」

「ごめんなさい、火賀梨さん。先に行ってしまったて…」

「ゴメンね、カガリ」

「…だ、大丈夫、です。よ………それより、これから何をしますか?」

「今から火賀梨さんにはA q o u r sに住んでいる皆さんと会っても  
らいます」

「さつき果南から連絡もらったけど、みんな起きてるらしいわ」

「分かりましたわ。では火賀梨さん、合図があったら一緒に入りますわよ。鞠莉さん、お願いしますわ」

「シャイニー!このマリーに任せなさい♪それじゃ行ってくるね」

『みんなくシャイニー♪』

『『シャイニー!』』

『今日は突然だけどみんなに新しい仲間を紹介するわ。だからといって人形とかではないわよ?それじゃダイヤ、カガリ、カモン♪』

「行きますわよ火賀梨さん」

「はい……!」

「おはようございます……!」

意を決して入った大広間には鞠莉と3人の女性と3人の少女がいた  
た

(もしかして、これで全員…?)

この約束　いつまでも有効だよ

『良いですか？近々このAqoursに新しい子が入ってきます。仲良くするのですよ。それと、この話は子供たちには言わないでくださいね』

(前にお姉ちゃんから新しい子が来るって聞いたけど、いつ来るんだろう。どんな子かなあ？怖そうな子じゃなければいいなあ。うう……緊張するなあ)

(あ、鞠莉さんが入ってきた。お姉ちゃんの姿がまだ見えないなあ。お姉ちゃんはなにしてるのかな？)

「みんなくシャイニー♪」

「くシャイニー！く」

「今日は突然だけどみんなに新しい仲間を紹介するわ。だからといって人形とかではないわよ？それじゃダイヤ、カガリ、カモン♪」

(　！　お姉ちゃんが言ってた事って今日だったんだ！まだ心の準備ができてないよう……。でもしつかりしなきや、頑張りビイしなきや！)

「おはようございます……！」

鞠莉が入ってきた扉から、一人の女の子が緊張しながらやってきた。

背はこの施設にいる子供たちとさほど変わりはないが、漆のような綺麗な黒髪、紅玉のように紅く緋い虹彩を持ち、左目の目元には2つの泣ボクロ、タレ目ではあるが芯を持った眼差し、そしてどこか達観したような大人と間違えてしまうような雰囲気を持つ少女

(ふえ……まるでお姉ちゃんみたいなお子だあ！可愛いなあ、私がお世話話したいなあ♪)

「陸奥　火賀梨って言います。これからよろしくお願いします！」

これが私と陸奥　火賀梨ちゃんとの出会い。きっとこれからステキな毎日が始まるんだ！

「陸奥 火賀梨って言います。これからよろしくお願いします!」  
(うわあ、自己紹介簡易すぎやしないか?もうちよつとなんか言った方が良かったんじゃない?何喋る?...なに喋ろう...よし、ここは適当に)

「実は火賀梨さんはこの前の火事の被害者で、あまりのショックで自分の記憶を失くしてしまったのですわ。ですから皆さん、火賀梨さんにはとっても優しくしてくださいませ」

「二はい!」

「良い返事ですわ♪では一人ずつ順番に自己紹介をしていきましょうか」

(あ、そっか。今は記憶喪失ってことになってるんだった...俺の自己紹介はあれが正解だったのか。あぶないあぶない)

「まずはチカから言うね!私は たかみ ちか!6才です!好きなたべものはみかん!よろしくね♪」ニコッ

(千歌ちゃん相変わらずの元気印っぷりだ)

「...私は さくらうち りこ です。チカちゃんと同じ6才です。音楽が好きです。あの、よろしくお願いします」

(ほう、HPTよろしくツインテールか。梨子ちゃんはオドオドしいな感じだね)

「...オラは くにきだ はなまる ずら。...これからよろしくずら」ジトー

(? なんか花丸ちゃんからすつごい睨まれてる...前の俺が何かした?)

「千歌さん、梨子さん、花丸さんは火賀梨さんと同じこのAquoursの子どもです。仲良くなってくださいね?」

「それじゃ、次は私たちかなん?私は松浦 果南。個性は「人魚」で、人魚っぽいことはなんでもできるよ。趣味はダイビングで、アピールポイントはダイビングで鍛えられた筋肉と泳力かなん?とにかくこれからよろしくね♪」

(おう、前世の自己紹介のフレーズが飛び出してきたぞ！録音したかった…)」

「ヨースロー！私は渡辺 曜であります！個性は「魚雷」。魚雷を作って飛ばしたり、真っ直ぐに進むのが得意だよ！趣味はトレーニングで、果南ちゃん程じゃないけど筋肉はそれなりにあるはずだよ。今度触ってみる？…ふっ♪これからよろしくであります！」ビシッ！

(今度はスクフェスでのセリフ！心が躍るなあ！)

「次は私ね…はあい、リトルデーモン。私は墮天使ヨハネ、地獄の焰より生まれし運命を操る者よ。貴女はこの約束の地Aqoursに来るまでに中々の不幸の洗礼を受けたらしいじゃない？でも大丈夫よ。大聖域Aqoursは我が墮天結界の中、故に貴女に不幸が降りかかることは無い。さらにリトルデーモンになればこのヨハネの加護を受けることが出来るわ。どう？私と一緒に墮天、しない？」ギランッ

「アハハッ！善子ちゃんは火賀梨ちゃんのことを凄く心配してるんだね？」

「ヨハネよっ！それにリトルデーモンに気を配るのは当然のことよっ！」

(出たよ、よっちゃんの墮天ツンデレ！生で聴けるとか最高っ！)

「ルビイは黒澤 ルビイって言います！何か分からないことがあったら遠慮なくルビイや他の人たちに聞いてね？それと…ルビイをお姉ちゃんだと思って接してくれると嬉しいなあ♪ルビイも火賀梨ちゃんのお姉ちゃんになれるように頑張ルビイ！」

(ルビイちゃんの頑張ルビイ頂きました！でもやけに俺に食いついてくるなあ？)

「最後は私たちね♪ダイヤ？」

「ええ。改めまして火賀梨さん、私は黒澤ダイヤと申します。個性は「ダイヤモンド」、読んで字の如くダイヤモンドを生み出し、操り、纏うことができますわ。火賀梨さんがこちらに来たときにも言いましたが、このAqoursを我が家だと思いき心身ともに健やかにお過ごしくださいませ」

「シャイニー♪このAqoursの施設長の小原 鞠莉よ♪気軽にマ

リー と呼んで頂戴ね？私の個性は「シャイニー」！このAquoursには私のシャイニーが沢山詰まっているの♪きつと貴女にもマリーのシャイニーが届くと思うわ。これからよろしくね、カガリ！」

「はいー！」

……………

……………

「ヨハネが張った魔天廻廊で安寧の時間を過ごしなさい」

「それってつまり、午後は食休みのため少し室内で遊んでから外で遊ぼうってことだよ？善子ちゃん」

「ヨハネー…そう言うこと。だから今はあまり過激な遊びはしないことよっ。」

「「はーいー！」」

自己紹介の後、朝ご飯を食べ、外で遊び、昼ご飯を終えて只今P.M. 1:07。ルビィちゃんは朝の自己紹介で宣言した通り火賀梨の姉として面倒を見ていた。と言つても食後の歯磨きで新しく歯ブラシを出したり、外で遊ぶための道具の保管場所を教えたり程度のもの。しかしルビィちゃんが火賀梨にかまう度、花丸ちゃんが不機嫌な表情になるのを火賀梨は見逃さなかった。

「かがりちゃん、チカたちといっしょにおままごとしよう！」

「ほかに誰がいるの？」

「えつとねー、りこちゃんと よう先生と よしこ先生！」

「はなまるちゃんは？」

「はなまるちゃんは本をよむんだって！」

「そうなんだ…ごめんね ちかちゃん。私 はなまるちゃんと本読みたいんだ」

「そっかー。じゃあ明日あそぼうね！」

「うん！」

……………

「はなまるちゃん、何よんでるの？」

「……かがりちゃんには関係ないすら」

「そう…」

「…」

「はなまるちゃんはルビイ先生のこと好きなの？」

「！……かがりちゃんには関係ないすら」

「私はルビイ先生のこと好きだよ？優しいもん！」

「……そう」

「うん！だから将来はルビイ先生と結婚するの」

「!!? それはダメすら！ルビイ先生はオラとずっと、ずーつといっしよにいるすらー！」

「むう、でも私がルビイ先生と結婚したら はなまるちゃんよりもずつといっしよにいれるもんねー！」

「そんなことさせないすら!!?!!?だってルビイ先生はオラと!!?」

オラと………オラに、……おら………うう、うう……ひつく……わああああああ!!?」

「えっ！ど、どうしよう…」

「花丸ちゃん！どうしたの!!?」

「うう……ルビイせんせー！……わあああああん!!?」

「……火賀梨、ちよつと来てくれる？」

「ヨハネ先生…」

「花丸に何を言ったの？」

「えつと……それは……」

「…べつに私は怒ってはいないのよ？ただ、花丸になんて言ったのか知りたいだけよ。ダイヤやマリーに言ったりはしない。約束、するから」

「ほんと？」

「ええ、墮天使ヨハネの名に誓って」

「…ルビイ先生は優しいから好きって。将来は結婚したいって、言ったの」

「そう、やっぱりね…」

「…?」

「花丸はきつと貴女にルビイを取られたって思ってたのよ。まあ、ルビイが火賀梨に目をかける理由は分からなくもないけど…。とりあえず、火賀梨が気にすることじゃないわ。」

「…？はい」

「よしこ先生ー？続きしよー？」

「今行くわ。あと私はヨハネ…：火賀梨、花丸の所に行つて仲直りして来なさい。いいわね？」

「はい」

「はなまるちゃん…」

「…かがりちゃん」

「イジワルして泣かせてごめんなさい！」

「ううん。オラも困らせてごめんなさい。」

「…仲直りしてくれる？」

「もちろんずら！」

「…：花丸ちゃん、火賀梨ちゃん。ルビイのせいでケンカしちゃったんだよね…だからルビイもごめんなさい！」

「ルビイ先生は悪くないよ！」

「私のはなまるちゃんにイジワルしたから…」

「オラが泣いちゃったから…」

「…：なんで3人揃つて謝り大会をしてるのよ…。もう外で遊ぶじかんよ。千歌たちは先に外に出たわ。ルビイ達もさっさと用意して来なさいよ」

「…：はい、よしこ先生（ちゃん）！」

「ヨハネよっ!!？」

……………

……………

……………

その後は外で目一杯遊んで晩ご飯。今日は火賀梨がきたお祝いだつてことでもいつもよりおかずの量が多かつた。そして…

「火賀梨さん」

「ダイヤ先生…?」

「これからA q o u r sで過ごすに当たって絶対に守ってほしいことがあります」

「守ってほしいこと?」

「はい。それは『私達A q o u r sは10人で1つ。一人でどこかへ居なくなることは決して無いように』してください。」

「…!はい!!?」

「いい返事ですわ♪では…」

『ようこそ火賀梨ちゃん、A q o u r sへ!』



## 自分を超越ることに ただ一生懸命

私がAqoursに入ってから10年ぐらい経った。

その間？特に何もなかったかなん？個性の特訓で肺活量を鍛えるためにダイビングしてみたり、千歌ちゃんの宿題をみたり、中学校の担任が園田海未ちゃんだったり、部活を兼部したり…

そうそう、通っている中学校んだけど、まさかの浦女！「市立浦の星中学校」って名前でも場所も長井崎中と同じ。最高すぎるZE！

んで、今日は中学最後の夏休みが終わった日、つまり二学期の始業式の日。どの高校に行くか決めないといけない時期ですよ。

まあAqoursのみんなと一緒に過ごせるのならどこでもいいかなって思ってる。離れるなんて絶対に嫌だね。

『3年2組国木田花丸さん、桜内梨子さん、高海千歌さん、陸奥火賀梨さん。支給理事長室に来てください。繰り返します。3年2組国木田花丸さん、桜内梨子さん、高海千歌さん、陸奥火賀梨さん。支給理事長室に来てください。』

…何があった？

理事長室に入ると鞠莉ちゃんが待っていた。因みに、というかやっぱり理事長は鞠莉ちゃんです。

「小原理事長。ご用件はなんでしょうか？」

「あら、そんなに畏まらなくてもいいのに」

「学校ですし」

「可愛くないわね。もっと気軽にマリーって呼んでるじゃない」

「はいはいマリー先生」

「むう〜」

（心の中では親しくおもってますよ）

たとえ夢にまで見た好きなキャラだとしても年上には最低限の敬う気持ちはあるのです。

「それで？なんで呼んだんですか鞠莉ちゃん先生」

「そ・れ・は・あなた達の進路についてヨ！」

「ずら？」

「みんなには雄英高校に進学してもらおうわ。といつても普通科に、なただけだね。あの高校に小原家（ウチ）は結構投資をしててね、入れてもらえるように交渉できるのよ」

「それでなんで雄英高校なんですか？」

「簡単に言えばみんなの安全を守るためね。あそこならセキュリティも万全だし、先生方もプロヒーローの方たちばかりだし」

「なら土傑高校でもいいんじゃないですか？」

「それもそうなんだけどね。近々校内に遠い他県からくる生徒の為に寮を建設しようとしているのよ。あとどっちかというとなら雄英高校のほうがウチに近いじゃない？」

「そうですか…」

「そうよ？ウチのところから近い場所にあつて、安全性もそれなりにあつて、小原家がある程度意見が出せる。大事な子供たちのためですもの、これぐらいはしたいのよ」

「『鞠莉先生…』」

「ウフフ、惚れちゃった？」

「『過保護過ぎです（ずら）』」

「『……（ω・ω・ω）』」

子供のためっていつてもさすがにやりすぎ。

…原作介入するのかあ。

……

……

……

「つてことがあつたんだよねー」

「…それ、オレ様に言つていいことかよ」

「まあ桜ちゃんだし？広めないでしょ。それより素が出てるよおっさん」

「桜、おっさんじゃないよう？」

ところ変わつて放課後。クラスメイトの火水風かすかせ桜ちゃんと一緒にお話タイムです。

火水風 桜。2年生に上がった時にクラスメイトになった子で、A  
oursのみんなの次によく話すんだ。

個性は「錬金術」。見た目と声が相まって、自己紹介で美少女を装っていたから小声で「カリおっさん」なんて漏らしてしまったからか、すんごい目つけられた。今では仲良くしてもらってるけどね。

「そうだったねー。あ、話の続きってワケじゃないけど桜ちゃんは進路どうする予定？」

「チツ、露骨に話そらしやがって…んー、無難に研究者かなあ。個性的に」

「やっぱそうかあ。敵に認定されないように気を付けてね」

「わあーってるって。オレ様を誰だと思ってやがるそんなハマはしねえよ」

「だよね。…そろそろ時間だ。桜ちゃんまたね」

「おうまた明日」

さあ帰って特訓だ!!

## ヒミコとのちよつとした一幕

「終わったー!!!」

「やつと肩の荷が下りたずら」

「後は結果が出るのを待つだけね」

「みんな受かってるといいね」

雄英高校の普通科の入学試験日。

お疲れみんな。自分もだけど。

「これからどこかよって行かない？」

「いいずらね!この辺のおいしい食べ物把握済みずらく♪」

「花丸ちゃんは食べるのが本当に好きね」

なんか話がまとまってる…。ま、華の中学生だものダイヤちゃんたちには連絡すれば大丈夫でしょ!

? 「あの子たちかあいなく。お友達になりたいです」

.....

.....

.....

今日、雄英高校の合否判定が届いた。勿論合格です。全員。

それで学校に報告にきたんだけど、

「さあ、遠慮はいらわないです。存分に打ち込んでくるですよ」

「は、はい……」

どうしてこうなったんだろう?

所属していた部活に顔を出しに来たんだ。名前は「ぶ部」。舞と武を司る部活動って意味らしい。

ウチの学校の部活動ってちよつと……とかかなり特殊で、変な名前の部活動がいくつもあるんだよね。

なんでも、一時期生徒数が減ったときがあつて部活動の数を縮小しなきゃいけないくて、その時の名残らしい。

代表的なものが表現部や水中部なんだけど…  
話がそれた。閑話休題

私がぶ部で習ったのが剣舞と無手術、環境利用闘法。  
教えてくれた先生が櫛ちゃん先生、神田先生、海未ちゃん先生の3名。

それぞれ「危剣ダンシングデンジャーの舞」、「胎動」、「操具」という個性をもってるらしい。

それで、合格の報告を顧問の先生にも教えに行ったら、

「櫛ちゃん先生、普通科合格しましたー!」

「おめでとうです、火賀梨ちゃん」

「ありがとうございます」

「あ、そうだ。息抜きがてらに運動しません?」

「いいですね。ジャージ持ってきているのでやりたいです」

〜少女準備中〜

「運動の前に、これどうぞです」

「ん?どうしたんですか、この剣」

「贗作レーヴァテインです。表現部から借りたのですよ」

「え…。あの巨人スルトルが振るったといわれる剣ですか…?」

「そうです。そして私が使う得物は贗作村正です。これも表現部から借りました」

「……」(??□?— —)

ってなった。死んじゃうよう…

……

……

……

結果、しごかれた。めつつつちやしごかれた。

櫛ちゃん先生の後海未ちゃん先生ともやって精神がズタボロDE

TH。私のライフはゼロよ!

「先生たち張り切りすぎだつて…結局最終下校時間まで模擬戦させら

れたし、花丸ちゃんたちは帰っちゃったし…」

「ねえねえ、ちよつとい〜い?」

「はい?」

突然後ろから話しかけられた。正直びっくりした。

一応武道を習っているから気配察知にはできるはずなんだけど、まったく気付かなかった。

話しかけてきた子はブロンドの髪を両サイドでシニヨンをつくった、セーラー服にクリーム色のセーターを着た、16、7歳くらいの女の子。

「君、かぁいいね。お名前書いてもい〜い?」

「陸奥 火賀梨。あなたは?」

「私はトガ。トガ ヒミコです。私見ました、雄英高校に受験しに行ったところを。その時にかぁいい女の子たちと歩いているのを! 私、あなた達とお友達になりたいの!!」

「そ、そっか…。うん、じゃあよろしくねヒミコちゃん」

「はい!」

なんか怖い娘だけど学校外でのお友達ゲットだぜ!

「あなたのこと、教えてください。ね?」

## EP2\*1学期

これが雄英普通科アカデミー！

おっはよー、てめーらあ！陸奥火賀梨だぜ！

今は絶賛入学式中なんだけど、A組の生徒が全員ボーイコットしてるのか式に出てないんだよね。学級崩壊？

周りの先生方は驚いてる様子はない（どっちかっていうと呆れてる？）から問題はないと思ってる。毎年起こってるの？

そんなことはどうでもよくって、さつきから時々聞こえる爆発音は大丈夫なのか？周りは気づいてる感じはしなぞい。あれか、プロヒーローいるからどうにかしてくれる精神か。お気楽だねえ。

……何回か「死ぬっ!!」って聞こえるけどホントに大丈夫か？流石に不安になってくるよ…

……………

……………

……………

式が妨害されることなくなんとか終了。俺のクラスはD組だぞ。もちろん花丸ちゃんたちも一緒だぜい。イエイ

今日はあとHRで自己紹介、クラス長や委員会決め、諸連絡をうけたら帰れる。

因みにクラス担任はミッドナイト<sup>香</sup>山<sup>睡</sup>先生でした。

（改めてクラスメイトを見ると高飛ーな娘が多いなあ。西木野病院の一人娘に薬獅子の跡取り、政治家の娘もいるわ…）

普通科のクラス分けなんだけど

C組はヒーロー科予備クラス

D、E組は貴族クラス

ってかんじかな。

マリー先生のような<sup>親</sup>考え方を<sup>バ</sup>する人<sup>カ</sup>ってやっぱいるんだ。

「そんな難しい顔してどうしたの？」

「ん？入学式のことであつとねー」

「A組の子全然いなかったね。どうしたんだらう？」

「それもだけど爆発音聞こえなかった？」

「ううん。聞こえなかったよ。もしかして、『また』？」

「多分」

「そう…」

梨子ちゃんからよしよしされる。めっちゃ恥ずかしい。

少し前から個性による発火や爆発の音に敏感になつてゐる。理由はきつと俺の過去が原因。そのせいか、音のことを聞きたびにみんなからは心配される。

（まあ仕方ないか。俺が施設に来た理由が実家の全焼だったし、トラウマになつてゐるんだらう）

自分ではそんな感覚無いけどね！

「ちよつといいかしら」

「はい、なんででしょうか」

「貴女たち随分と仲よさそうだけれどこの中学校かしら」

梨子ちゃんとイチヤイチャしてると、赤髪つり目のクラスメイトに不意に話しかけられた。

人の安寧に水を差すとは…犬に食われてまえ！（なんかチガウ）

てか西木野病院の娘じゃん！

「どつちも浦の星中出身だよ。私は陸奥 火賀梨、こつちは桜内 梨子ちゃん。これから三年間よろしくね」

「私は西木野 真姫。音ノ木中出身よ、よろしく。火賀梨、ね。貴女あつちの栗毛色の髪の子と同じく面白い「音」を鳴らしているのね」

「栗毛色…？ああ花丸ちゃんだね。あの子も浦の星中の子だよ」

「そう。とりあえず貴女のこと観察させてもらうわ」

最初から真姫ちゃんの親愛度が高いのですがこれは…もしかしてモテ期？

「私、マツキーの患者になりそう」

「油性ペンじゃないのだけれど…。そうね、火賀梨が患者になるのなら身体中隅々、頭の中まで見てあげるわ」



「お、おう……」

あれ、そういえば梨子ちゃんは……あ、あつちのほうで千歌ちゃんとマルちゃんと話してる。何言ってるのか全然わかんないけど睨まれているわ……

……

……

……

そのあとは特にいざごごはなく今日の授業は終わり、放課後。といつてもまだお昼ちよい過ぎだけど。

Aqoursのみんなとは分かれて一人ウインドウショッピング。何が楽しくてひとりで回ってるのさ。……ねえ？

「……で？ずつと見てるだけ？」

「アハッ、久しぶりだね、火賀梨ちゃん！」

まばたきの瞬間に赤黒い炎が視えたからなんとなく店の間の路地に向かつて声をかける。

「つていつても前回から3日しかたつてないよヒミコちゃん」

「だから刮目しておくの！」

「いや私女の子だし」

「えへへ」

「相変わらずだねヒミコちゃんは。いつもの、でしょ？」

「うん！それじゃあいただきまーす♪」

そういつて首にかみつくヒミコちゃん。

ズグンッ「ん……っ！」

ピチャピチャ「ふっ……っくうっ!!」

チウチウ「はあ……あ、っん／＼」

「プハッ 美味しかったです、ごちそうさま？」

「ふーっ、ふーっ……おそまつ、さま」

「火賀梨ちゃんの血はおいしいね！また飲ませてね!!」

「ん……わかつ、た。それじゃあ、今度は」

「うん！火賀梨ちゃんの番だよー。はいっ」

セーターのボタンをはずし、セーラーもファスナーをおろすヒミコ

ちゃん。俺は露になった胸元に手をかざす。

「いただきます」

瞬間、ヒミコちゃんの体から赤黒い炎が噴き出しかざした手に集まっっていく。

集まった炎を口に運ぶ。

ハムツ「うん／＼」

ジュルンツ「くくくつつつ!!／／／」

ゴクンツ「——ツハ、ツハア、はあ…」

「ぐちそうさま」

「…やっぱり、すごいよお火賀梨ちゃん。こう、ビリビリーツ、つてからだじゆう駆け巡るこの感覚、すごく気持ちいい／＼ますます好きになっちやうう」

「こういうので好きになられてもなあ」

「ウフフ。また、今度ねー」

ヒミコちゃんが闇に溶けるようにして去っていく。何回か見ているけどその場から一瞬で消えたようにみえるから毎回驚く。

(帰る前に痕を目立たないようにしたり増血剤買わないと)

………

………

………

???

∴

………

………

はじめまして。私は■■■■。■■■■■■■■■■の十五位、■■■■・■■■■

■■■■■■■■■■です。

——終始ビビってたけど、すごい索敵能力ね

そうなんですかね？昔から怖いなー、嫌だなー、つてどこになにかいたりするんです。だから、余計にビツクリしちやうといえますか…

——アంతタつて臆病なのね

そ、そんなことないですよ!?!…でも怖いじゃないですか。茂みとか

裏路地つて。緊張しますし、怖いものがあつたら怖いじゃないですか  
……

—カッコよかったわよ

!!あつ、ありがとうございます！これからもカッコイイ姉になれる  
ように頑張ります！

……

……

…

「ん……あ?」

「くう……おねいちゃあく……くう……」

「ずらあ……じゅらあ……」

(ここは……■島?……いや、淡島だ。Aqoursの私の部屋だ、うん。…隣のベッドでルビィちゃんと花丸ちゃんが寝てるけど俺の部屋だ。)

俺がAqoursに入ってから新たに来た子供はいない。だからか贅沢なことに一人一部屋もらっている。

子供たちの部屋には机が一つ、ローテーブルが一つ、座布団が二つ、タンスが一つ、クローゼットが一つ、ベッドが二つある。

一部屋丸々もらつてはいるが、よく一緒になつて寝てる。今回は昨日みんなどで見た映画が思った以上にホラーだったから。

果南ちゃんはダイヤちゃんと鞠莉ちゃんと。千歌ちゃんと梨子ちゃんは曜ちゃんと善子ちゃんと。

「火賀梨ちゃん、花丸ちゃん。怖くなかった?今日は一緒に寝る?」  
「二人はルビィが守るよ。だつてルビィは先生だもん!」つて。自分だつて怖かつただろうに俺たちのことを心配してくれる。

不意にさつきまで見ていた夢を思い出した。臆病で怖がりなのに大好きな弟妹のために勇気をだす女性。

その女性がルビィちゃんと重なつた。

「ありがと。おねえちゃん。……んじゃ、まあ今日もトレーニングに励みますか!」

### 3 週間で勝負

「特別合同授業…ですか」

「そう！貴女なら受けても問題ないと思っただけけれど、どうする？」

「そうですね……」

ボンジュくルビー！陸奥火賀梨ですつ。

：俺系女子には似合わないなコレ。まあいいや、今先生から提示されてる特別合同授業について説明しよう。

特別合同授業は特殊状況下個性使用許可証を取るカリキュラムの内の一つで、ヒーロー科の生徒と一緒に個性の訓練を行うんだ。

職業でヒーローにはならないけど、個性を活かした職業に就きたい人たちに提案されるものなんだよね。

「一つ質問いいですか？」

「いいわよ、なにかしら？」

「なぜ入学早々に？進路が決まってるからでもいいのでは…」

「その質問は最もね。一番は『備えあれば患いなし』、ひよんなことからヒーローや就職先で個性を使うことになるかもしれないじゃない。決まってるから、よりは即戦力になりやすいでしょう？…あと3週間後の体育祭に向けてってところかしら」

「体育祭ですか…」

「そう、雄英高校体育祭。かのオリンピッククに代わる一大イベント。観たことあるでしょ？」

「はい。個性を使ってもいい行事ですよ。将来有望な相棒サイドキックを探すための」

「プロヒーローはね。あなた達生徒にとつては自分の個性と向き合うための場でもあるわ。ヒーロー科全員もそれ以外例も。最も、学校行事なんだから楽しむのが前提よ♪」

私、青臭いのが好きだからっ！

って、笑顔でなに言ってるんですか先生。

「ただ…ここ近年はヒーロー科の子たちばかり目立って、生徒全員

が<sup>青春</sup>楽しめる。なるべくみんなが楽しめる競技を、とは考えてはいるけれど一番の目玉がトーナメントバトルだから…」

必然的にヒーロー科の子にね…。そう言い淀む香山先生。

確かに、前に見た見た体育祭の映像ではヒーロー科以外の生徒の表情が『つまらない』って感じだった。

鞠莉ちゃんも、

「お祭りなんだからもつとスマイルな顔をすればいいのに」  
って言ってた。

「だからなるべく個性を使うことに慣れてほしい、って思ったのよ」  
普通科には週一で個性制御の授業がある。といっても超常である個性を日常生活程度に抑え込むための、なんだけど。

個性の訓練があるとはいえ、ほぼ毎日、実践的な個性の特訓をしているヒーロー科に比べたら…指向性も、練度も違う。

それを将来役に立つはずとは言え、学校行事のためだけに許可すると。

「いいんですか？ソレ」

「そうねえー、ふつうは許可しないわね」

「それなら…」

「いいのよ。雄英は自由な校風が売り文句、それは先生たちにも適応されているもの。私が貴女たちの将来を考えてやってることだから」

香山先生カツコイイ…！

「モチロンッ！私が青臭い青春を堪能したいってのもあるけどねっ

!!」(・ω・) b

感動を返してよ…

「それで、火賀梨ちゃんはどうかするのかしら？」

「やります！特別合同授業、受けさせてください」

「OK!!それじゃあまずは明日の1―Bのレスキュー訓練に参加しな  
さいよ」

「はいっー……………え？」

あ、明日？

……………

.....

.....

???

∴

∴

∴

仲間を泣かせる■■■■なんて、そんなの■■■■じゃねえ。

これ以上仲間をキズつけられたら、テメエを、灰にしちまいそうなんだ。

俺は■■■。■■■■の■■■・■■■■だ!!

∴

∴

∴

「仲間、か……」

日付変わって翌日の昼休み。屋外のテラスで千歌ちゃん、梨子ちゃん、花丸ちゃん、真姫ちゃんとお昼を食べながら今朝の夢を思い出した。最近身に覚えにない夢ばかり見る。自分が忘れていた記憶なんだろうか……?

俺が覚えている最も幼い記憶が、5歳のころに起こった火事。その火事で両親と妹を失ったらしい。らしい、っていうのは家族に関することが一切思い出せないから。

医者が言うにはショック性の記憶喪失だと。

「火賀梨ちゃん、どうかした?」

「なーんでもない。A q o u r sのみんなが大好き〜って思っただけ」

「えへへー。チカも火賀梨ちゃんだーい好き♪」

「私も大好きよ」

「マルも大好きずらく」

「ハア∴仲がいいのね、あなた達」

「もちろん真姫ちゃんのこと大好きだよ。だって私マツキーの患者だもん」

「……ありがとう」

「「真姫ちゃんがデレた(ずらっ)?!?!?」」

「くくくっつ／＼／それよりもっ火賀梨、貴女今日の午後の授業大丈夫なのかしら?・ヒーロー科との合同授業でしょ」

「大丈夫、大丈夫。どうにかなr」セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外に避難してください。セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外に避難してください。い。」「…え?」

「「セキュリティ3!!?」」

「「…ってなに?」」

「この雄英高校に侵入者が出たってことよ」

「エツツ!!逃げなきやじゃん!!」

「マルまだご飯食べきつてないずらあゝ」

「そんなことより外に避難しなきや!」

「…侵入者に捕まりに行くのかしら、あなた達」

「「ふえ?」」

「そうだね。外からやってきてるぽいし、屋外に避難するのは悪手だね」

「じゃあ私達どうするの!?!」

「教室に立てこもって先生方<sup>プロヒーロー</sup>に対処してもらおうしかないね」

「どうやらその心配はいらないみたいよ。ホラ」

真姫ちゃんが指差した先には雄英高校の正門からなだれ込む報道陣の姿があった。

「「報道陣……」」

「それなら慌てなくてもよさそうね」

「ならマルはご飯の続きすら」

「もくっ、チカたちのビックリを返してよねっ!」、(、口、)ノ

「…ありがとう、真姫ちゃん」

「べ、別にあの子たちが煩かったからコツチが冷静になっただけよ」

「それでも自分だって怖かったでしょ?」

「……／＼／」

「真姫ちゃん可愛い♪」

その日の合同授業は大事をとって中止になった。B組の生徒は訓練を行ったらしい。



最近、物騒なこと起こってるから

今日は1ーAとの合同授業。昨日はなんやかんやあって1ーBとの合同授業は中止になった。まあ当たり前か。

集合場所である校舎内駐車場C。俺以外に3人の生徒がいる。あ、先生来た。

「君たちが今日ヒーロー科と一緒に授業を受ける子たちだね。僕はスペースヒーロー13号、今回授業を担当することとなります。よろしくお願いします」

「「よろしくおねがいます」」

「今日の授業は少し離れた演習場でおこないます。皆さんバスに乗ってください」

「「はい！」」

「せっかく合同授業で一緒に受けるんですし、軽く自己紹介をしませんか？私は李野田 真乃。経営科所属です。よろしくおねがいます」

「まっほー！菜森 まなだよー♪サポート科ですっ。よろしくね！」

「私は陸奥 火賀梨。普通科の1年D組所属。よろしくー」

「……同じく普通科1年D組、弦結 彩」

「火賀梨ちゃんと彩ちゃんだね！まな、覚えたよ！」

「ちん??」「……」

「ああ、これはマナの癖なのであんまり気にしないほうがいいですよ」  
「へえー、知り合い？」

「はい、私とまなは中学校の頃からの知り合いなんです」

「それとテスターねっ」

「私の親が経営するサポートアイテム会社のテスターをしてもらってるんです。今は洋服のようなパワードスーツの設計を行ってまして、今回の授業で数字を採ろうかと」

「……自分で採らないの？」

「私、あまり運動は得意ではないし、マナの方が個性的に数値採りに向

いているので……」

(なんかいいねえ、こういうの)

「皆さん、そろそろ着きますよ。降りる準備をしてください」

「二「はい／はい」二」

—演習場「ウソの災害や事故ルーム」—

到着後マナちゃんがスーツを着たり、真乃ちゃんが測定器を用意したりと準備に入った。俺は13号から耐火服を借りた。

お、1—Aの生徒がきた。

『スッゲー!!USJみてーっ!!』

「待たせたな、13号」

「いえ、大丈夫ですよ先輩」

「後ろの生徒が今回合同授業で参加する生徒か。…で、オールマイトはどこにいる。ここで待ち合わせのはずだが」

「それが……通勤時に制限ギリギリまで活動したみたいで。仮眠室で休んでます」

「不合理の極みだなあ、オイ。…ハア、まあいい。始めるか」

「なにかあったのでしょうか」

「……今日の授業、教師3人」

「病欠? 招集?」

「今回の訓練は他の学科のやつらとも合同で行う授業だ。心してかれ」

「えー、始める前にお小言を1つ2つ。…3つ。4つ、5つ、6つ……。皆さん——

—そろそろ、授業が始まるころかなあ—

「ッ!!」

「……? 火賀梨?」

—ジャミングを張れ、ゲートの準備だ—

(だ、誰!?)

—さあ、雄英に乗り込むぞ—

(誰かが…)

—楽しみだなあ…オールマイトを殺すの—

(オールマイトを殺しに来るっ!!)

——以上、ご清聴ありがとうございました」

「よし、それじゃあまずは「先生っ!!」なんだ…っ!!…っ!!…よく気づいた」  
演習場の中心にある噴水前に黒いモヤみたいなものがかかる。

A組の担任が警戒態勢のまま俺たちの前に立つ。

「全員一塊となって動くな…13号、生徒を守れ」

モヤが広がり、その中から全身に手を付けた男をはじめ、多数の人間があらわれた。

流石にたくさん出てきたから俺たち4人はA組の生徒達のところに避難する。

「まな、なんかこわいよお…」

「なんだなんだあ?!入試みたいに、既に始まってるのでパターン?」

「違うよ」「ああ、あれは…」

「敵だ」  
ヴァイラン

モヤの敵と手だらけの敵が何かをしやべっている。

よく聞き取れはしなかったけど、オールマイトを—だとか、殺す—  
だとか。

「あの騒ぎはあいつらの仕業だったか。13号!避難開始!学校に連絡も併せてだ。相手はセンサーの対策も頭にある連中、電波、電気系の奴が妨害している可能性が大だ。連絡ができる奴は試せ。俺はここで食い止める」

「いくら先生でもこの数相手には無茶ですっ!!イレイザーヘッドの戦闘スタイルは敵の個性を消してからの捕縛。正面戦闘ははつきり  
いって…」

「ヒーローは一芸だけでは動まらん。…任せたぞ13号」

緑髪の生徒の心配を、安心させるような声色で制し、敵に向かって

飛び出すイレイザーヘッド。それと同時に動き出す敵。俺たちは邪魔にならないようすぐに避難を開始する。

だが、演習場と外をつなぐ扉の前に噴水前に現れたモヤが出現する。

「初めまして雄英高校生徒諸君。我々は敵連合。僭越ながら、この度ヒーロー<sup>雄英</sup>の巣窟<sup>高</sup>に入らせていただいたのは、平和の象徴たるオールマイトに息絶えてもらいたいと思つてのことです。本来ならばここにオールマイトがいらつしやるはず……。ですが、なにか変更があつたのでしょうか。まあ、それとは関係なく、私の役目は——」

「その前に俺たちにぶつ潰されると思つてねえのかよっ！」

敵が言葉を言い終わる前にA組男子生徒二人が個性を発動させながら突つ込んでいく。

「どきなさい！二人とも！」

「あなた達を、散らして捌り殺す！」

いうや否やモヤが生徒全員を取り囲む。とつさのことで敵につつこんでいつた生徒も動きが止まる。

モヤによつて完全に視界がふさがれる前に、全身<sup>フル</sup>装甲<sup>プレート</sup>のメガネ君が数人の生徒を、まなちゃんがスーツの機能で真乃ちゃんと、それぞれモヤの範囲から逃れようとしているのが見えた。

—演習場「USJ：火災ゾーン」—

視界が開けると集合住宅や戸建ての家屋、商業ビルなど市街地が丸々燃えていた。

「(っ)は……っ。」

## 《覚醒》

「お？女のガキが出てきやがった。一人だが楽しめそうだ」

「お前あんな細いのが好みかよ。俺はもつと肉付きいいのが好みだわ」

「うっせーデブ専。なら俺だけでたのしむぜ。精々、イイ声で泣いてくれよ？」

突然景色が変わったから少しの間呆けていたら、周りに人が集まってきた。

「…まずは逃げるっ!!」

「おーおー、鬼ごっこか。楽しもーねえ、嬢ちゃん♪」

（周りには火がある。向こうはコツチをなめてかかっている。とりあえず、逃げ回りながら炎の回収と捕食をしないと……!）

比較的道幅の広い通りを選びながら、目につく炎を片っ端から操作権を喰らい、自分の周りに移動させつつ炎を食べていく。

火災ゾーン全体に万遍なく配置されていたのか、移動するたびに追いかけてくる敵が増える。

極度の緊張と移動・操作・捕食のマルチタスクで視野が狭まっていたのか、ビルの破片に躓いて転んでしまう。

「鬼ごっこは終わりかなー？それじゃ——」

「……ハアアッ!!」

「ぶべらっ!!」

ナニかされる。そう思った、その時。

しっぽの生えた道着を着た男の子が尻尾ビンタで、迫ってきた敵を打ち飛ばし割って入ってきた。

「大丈夫かい、立てる？」

「……あ。はい」

「痛ってえ……まだガキが居たのかよ……。テメエら、ガキども捕まえんぞー!」

「キミ、逃げるよ!」

「男1女1、男は最悪殺してもいい!女はあまり痛めつけるなよ!!」

鬼ごっこ再開。逃げながらそれぞれ簡単な自己紹介をした。

こつちにやって来る前に此処の出入り口を確認したらいいので、尾白君の先導のもと、向かう。

追ってくる敵はつかず離れずの距離で、たまに横から出てくる敵は尾白君の尻尾ビンタでいなしながら移動する。

少しして火災ゾーンの出入り口に差し掛かる。しかし出入り口にも敵が二人ほど待ち伏せしていて、挟まれる形になってしまう。

「やっぱり、逃がさない、為に。出入り口は、抑える、よね」

(このままでは俺たちは終わる。デッドエンドなら俺も戦う覚悟を決めないとな。)

「陸奥さん。僕が出入り口前の敵と交戦する。その間にこの火災ゾーンから逃げるんだ」

「……ううん、大丈夫。私も、戦う覚悟を決めた」

「それは危ないよ！第一君は普通科の生徒で、個性だって戦闘向きでは」

「戦闘向き？尻尾が生えてるだけの人には言われたくない、かな。それに戦闘技術ならある」

追ってくる敵が来るであろう方角に体を向ける。本来であれば敵だろうと人に向けるべきではないんだけど。今はしかたない。

溜めた炎を身体中にまわしつつ、足を肩幅程度に開き、腰を落とし、左手を握り腰の横につけ、右手を開いた状態で左手に添える。見た目は居合の構えに見えるだろう。

追いかけてきた敵が見えた。全員が来たかどうかはわからないが、やるか。

古今無双流 奥義：海拓うみびらきき『凧なぎ』

一閃。構えていた右腕を横に振りぬく。

一瞬の間をおいて目の前の敵が放射線状に吹き飛ばされ、建物の壁に激突していく。

直後、打ち付けられた建物が敵を生き埋めにしながら崩壊していく。

「ごめん…。陸奥さんって、強いんだね……」

「フウー……。そうかな？それより今のうちに出入り口制圧しないと」

「そう、だね。それじゃあ今度は僕に任せてくれるかな」

そう言うのと尾白君は尻尾を器用に使い、上空からの奇襲で敵に向かっていた。

俺は炎熱の身体強化を解かず、追加の敵がやって来るのを警戒していたが、崩れた方からは敵が出てくることはなく、出入り口の制圧が完了した。

「これで全員無力化できたのかな？」

「そうだと思う。ただ、僕たちは相手を縛るための道具がないから油断はできないけどね」

「そうだね。瓦礫下の敵には悪いけど、先生たちがやって来るまでは埋もれたままでもいいからお——」

——……。先生が殺される。……。誰か、助けて！——

(彩ちゃんの声！)

「——ねえ尾白君、ここの後処理頼んでいい？私、外の様子を見てくる」

「…わかった。けど無茶はしないでね」

「わかってる。私、普通科だし」

扉を開けると、遠くで相澤先生が黒く筋肉質な脳むき出しの敵に顔を地面に叩きつけられ、手だらけの敵が彩ちゃんに手を伸ばしていた。

その光景を見た瞬間、体の中で何かが弾け、気を失った。

『その娘から手エ、放せや』

畏レヨ我ヲ、敵連合ドモ。

★

僕は大きな間違いを犯した。

モヤに包まれた後最初に目に入ったのは大量の水と一艘の船。蛙

吹さんに助けてもらいながら船の上にあがることができた。

この水難ゾーンに飛ばされてきたのは僕を含めて4人。蛙吹さん、峰田君、そして普通科の弦結さん。

それぞれの個性を教えあつたうえで、まずはここから脱出するために、

①蛙吹さんが弦結さんを、僕が峰田君を抱えて船から飛ぶ。

②飛んでから峰田君を放り、蛙吹さんの舌で掴みなおしてもらおう。

③その最中に、僕が水面に対して攻撃を放ち、峰田君がモギモギを投げる。

④結果、水が戻ろうとする力によって水中の敵を一か所に集め、無力化させる。

⑤攻撃を放つたことで姿勢が崩れた僕を、弦結さんのあやとりで曳(ひ)き上げてもらう。

これでなんとか水難ゾーンから離れることができた。

初戦闘にして初勝利。

これが僕の心を尊大にしてしまった。僕らの力が敵に通用したんだと、錯覚してしまった。

そのあと相澤先生の戦闘が気になった僕らは水難ゾーンの端に沿って進み、中央の噴水前を見た。

そこには脳剥き出しの異形型の敵が相澤先生の頭部を掴み、何度も地面に打ち付けている様子が目に入ってきた。

僕らを散り散りにワープさせた敵が手だらけの男に近寄る。

詳細な話は聞こえなかったが、『死柄木弔』『黒霧』『生徒を逃がしてしまった』『ゲームオーバー』『帰る』と言っていた。

帰る。

オールマイトを殺す、という目的をすっぱりと諦める。可笑しい。ここで逃げてしまえば雄英の危機意識が上がり次の襲撃がより困難になるというのに……。

さらにゲームオーバーと言った。あいつらは人の命を、自分のしたことをゲームのイベントだと思っっているのか!?

そんな時だった



「あ、そうだ。帰る前に平和の象徴としての矜持を少しでもへし折って帰ろうー!!」

死柄木弔が一瞬ともいえる速さでこちらに近づいて弦結さんの頭に手をのばしたのは。

とっさのことで誰も動けなかった。このままだと弦結さんが殺されるー!!

『その娘こから手エ、放せや』  
ぞくり。

ズズズ、と体の芯から凍るようなその一言が聞こえた瞬間、死柄木弔は蹴り飛ばされていた。

「……火賀、梨?」

『ああ。大丈夫だったか、彩』

「……うん……うん!」

「痛いなあ。脳無が反応できないほどの速度で俺を蹴ったのか…。お前、一体ナニモンだよ」

『俺か?……今の俺は仲間を絶対守るマンだ』

乱入してきたのはこの授業を一緒に受けるはずだった、普通科の陸奥火賀梨さんだった。

全てを焦がす力に

「脳無、イレイザーヘッドはもういい。自信満々なあの餓鬼を殺せ」  
『遅え…よっ!!』

十数mの距離を一瞬でつめ、腕を振りかぶる脳無。

それを避けてカウンターで脳無の鳩尾に拳を打ち込む陸奥さん。  
しかし脳無はリアクションを取ることなく陸奥さんに追撃していく。

『効いてない?』

「当たり前さあ!コイツは対オールマイト用に作られた改造人間「脳無」。

オールマイトの100%の力にも耐えられるよう、ショック吸収の個性が入っているんだ。

ガキのヒョロい攻撃なんかで倒せないさ!!」

『ぞ。なら』

また一瞬のうちに脳無の懐に潜り込む陸奥さん。今度は拳ではなく掌を脳無の腹に当てる。すると、脳無が吹き飛んだ。

『成程な。衝撃じゃなきゃ吸収はできない、と』

「は?なんで脳無が吹っ飛ばされてんだよ」

『熱膨張による吹き飛ばし。ただの突風さ』

「風で引き飛ばした?…ふぎけんなよ、チートが!」

『ハンツ、喚くな砂利。…彩、センセの回収頼む』

「脳無、早く殺せ!!」

『行け!てめーら!!』

脳無がまた陸奥さんに襲い掛かる。繰り出される怒涛のラツシユを、余裕の表情で陸奥さんは攻撃をさばっていく。

僕らは何もできずただ陸奥さんの言うとおりに相澤先生を助けにいった。

「先生!」

「…………お、前ら…………。なんで、ここに。来てる、んだ…………。早、く…逃げろ」

「今、生徒の1人が他の教師にこの状況を伝えにいったそうです。そ

して、あの脳無と呼ばれていた敵は陸奥さんが抑えてくれます」  
「なん、だと……？アレは…生徒が、抑えられる。奴じゃ……ない。アレは……化け、物だ」

GRRRRRAAAAAA!!!

不快な咆哮がUSJ内にこだまする。音が発生した方を見てみると、脳無が燃えていた。

敵味方見境なく暴れていく脳無。

振るった拳が、放った咆哮が周りに炎を散らしていく。

「なんで、なんで脳無が燃え始めてんだ!!あいつは超再生の個性も入っているんだぞ!!それがあんなクソガキの炎で燃えてんだ!?おい脳無、止まれ!!」

「まさか……あれは博士が研究していた……!グウツ」

「ガハッ……チツ、なんであいつ俺の言うことを聞かなくなったんだよ!あああ!!!クソツ!!」

「クツ……死柄木弔、今すぐこの場から去りましょう!でない和我々もただではすみません!」

「ハア……脳無は壊れ、プロヒーローはやって来る……詰みじゃん、コレ……。帰るぞ黒霧」

「分かりました。それでは脳無は——」

「脳無は置いてく。俺たちの命令を聞かないモノは捨てておけ。んでもってガキどもを殺させる」

「……分かりました」

死柄木が黒霧のワープゲートの中に入り、姿を消す。

それでも脳無は止まらず、あたりに炎をまき散らしていく。

そして僕らの前に——

『やらせねえよ』

——来る前に陸奥さんが脳無に蹴り込んだ。それでもあまり効いた様子がない。

さらにはお返しとばかりに噴き出す炎が陸奥さんを襲う。避けはしても放出された炎で、陸奥さんの服が焼け焦げた。

先生でさえ太刀打ちできず、全てを焦がす力に僕たちは恐怖する。

そんな恐怖という暗闇に、一筋の光が僕らを照らす。  
「もう大丈夫だ……私が、来た!!!」

☆

脳無がまた火賀梨に襲い掛かる。繰り出される怒涛のラッシュを、余裕の表情で攻撃をさばっていく。

その隙に緑谷達が相澤先生を助けに動いた。

『さてと……どうするか』

脳無のラッシュははつきり言って驚異ではある。

だがそれだけだった。

一発の威力は神田先生の正拳突きには満たないし、

ラッシュの速度は二刀流で迫ってくる櫛ちゃん先生には敵わないし、

攻撃パターンは海未先生より圧倒的に少ない。

正直に言えば、温い。そう思っていた。

G R R R R R A A A A A A A A A A A A A A A A !!!

脳無を吹き飛ばして十数回、脳無が叫び始めると直後に爆風が起き土埃が舞う。

突風に対し腕を交差させ目を防御する火賀梨。

爆風が納まり防御の姿勢を解くと、脳無の姿が変わっていた。

全身は黒いままだが、剥き出しだった目や脳みそは溶け、そこから炎を噴き出していた。

体格はそのままに腕は太く長くなり、指は細く尖り切り裂けるような見た目に。

異常な変化に対し、火賀梨は一旦距離を置く。

周りの人間がすべて敵に見えるのか、先ほどまで戦っていた火賀梨より、近くにいた連合の二人に標準を定め攻撃していく。

腕を振るい切り裂くように攻撃する脳無。

その時、手の甲から炎が出て射程が伸び死柄木に火傷を負わせる。

さらに脳無が動く度に元からあった傷口から炎が溢れ、傷が広がっていく。

「……帰るぞ 黒霧」

「分かりました」

連合の二人が撤退すると今度は相澤先生の方に向かっていった。

『行かせねーよ。…虎<sup>ラ</sup>ひしぎ<sup>ド</sup>』

目で追えないほどの超スピードで間に割り込み、脳無に蹴りを入れる。が、衝撃吸収によって威力が大幅に減ったのかあまり効いてない。

さらにはショックエネルギーが傷口から炎を伴って放出され、カウンターを受ける。蹴り込んだ足に力を込め、反作用で間合いから離脱する。

追撃で腕を振るってくる。直撃はしなかったが熱によって防火服が焼け焦げた。

『やべえな…コレは』

一撃貰えば死ぬ。火賀梨に緊張が走る。

そんな時、

「もう大丈夫だ…私が来た!!!」

No. 1ヒーロー、オールマイトがやってきた。

## 『決着』

「もう大丈夫だ……私が、来た!!!」

「「「オールマイト!!!」」」

『…やつとか』

オールマイトの登場に僕らは安堵した。安堵してしまった。脳無が僕らに向かって攻撃をしてきたのだ。

「G A R R A A A r r r r r!!!」

「させんぞ! C A R R O L L I N A S M A S H!!!」

「何!?効いてないだ!!!」

「オールマイト!!あの脳みそのヴィラン、ショック吸収の個性も持っているそうですっ!」

「物理はあまり効かないと……というか熱くてまともにやりあえなさそうだな!!」

そういうと今度は5mほど距離を置き、腰の入った重い一撃を脳無に放つ。

重い一撃は風を引き起こし、周りの空気をも巻き込み竜巻となつて、地面を抉りながら脳無に襲い掛かる。

「D E T R O I T S M A S H!!!」

「G U R U U R r r r...」

「Holy S h i t!拳圧では炎が掻き消せないか。……っ!あのヴィラン、動く度に皮膚が欠け落ちている。所々骨まで見えているじゃあないか。まさか……文字通り、命を懸けて燃えているというのか!!」

それならばっ!!」

レスリングのタツクルのように低姿勢から脳無の右足を取る。そのまま右足を持ち上げ脳無を振り回し、水難ゾーンめがけて放り投げた!

「M A R R Y L A N D S M A S H!!!」

大きな水しぶきと大量の水蒸気が水難ゾーンから上がる。

だが、一向に水蒸気は止むことなく出ている。それどころか段々と

発生する水蒸気の量が増えている！

そしてまた、大きな水しぶきがあがりさつきよりも大量の炎を炎炎と噴き出している脳無が現われた!!

「GUGAAAAA!!!」

「Jesus!!水の中に落としても消えないのかいつ!!なかなか厄介な個性だな、お互いにとつて!!!」

オールマイトと脳無が目にも止まらない速さで殴り合っていく。

オールマイトが体を張って脳無のヘイトを稼いでいる隙に、僕らは陸奥さんと一緒に相澤先生を弦結さんの個性で作った即席の担架に乗せて入り口のゲートに向かっていく。

「やっぱすげーぜオールマイトはっ！全身火だるまのヴィランと正面切って戦えるんだからよお!!」

「ケロツ、峰田ちゃん言うとおりね。流石No.1ヒーローだわ」

「このまま勝っちゃうんじゃないかあ!!?」

『それは無いな。あのままじゃオールマイトは負ける』

「……どうということ?」

『元々の出自が違うんだよ。あれを止めるには心臓となっているコアを破壊し鎮魂するか、命尽きるまで待つしかない』

「それってアイツは倒せねえってことかよ!!?チートじゃんか!!」

「…ねえ陸奥さん、コアを破壊して鎮魂したら…脳無はどうなるの?」

『その身は灰と成り、魂は太陽神の元へと逝く』

「それって、さ。死ぬ…ってこと?」

「!!!」

『有り体に言えば、そうなるな』

「ならさつさとオールマイトに伝えて早いところ殺してもらおーぜ?!?あんなにアブねー奴なんだ、殺したって文句はねーだろ?!?」

「ダメよ峰田ちゃん。ヒーローが軽々しく「殺す」なんて言っちゃ」

「うん。蛙吹さんの言う通りだよ。どんな理由があったとしても、ヒーローはヴィランを殺してはいけないんだ」

『……温いな。お前ら先戻ってる、俺はアイツを鎮魂してくる。…虎』

「……!!火賀梨、待って!」

陸奥さんがオールマイトが脳無と戦っている場所へと戻っていく。その途中、戦闘によって捲れ上がった地面からとぐろ状になった放水管を引つ張り出してきた。

『チツ、こんなんでも使わなきやいけねえ相手か、しようがねえなあ……。しようがないから、しようがなくやってやるよ』

「なっ!!陸奥少女、なんでここに来た!?!緑谷少年達と一緒に避難していたのだろう?!」

『あの脳無を鎮魂しに来た。下がれ、巻き込まれるぞ』

陸奥さんが持ってきた放水管の先を脳無に向けた。すると、

リイイイイイン——

鈴の音が聞こえてきた。それと同時に、脳無から噴き出していた炎が掻き消えた。そして、

リイイイイイン——

もう一度音が聞こえると、今度は脳無が四肢から凍り付いていった。

『炎ハ魂ノ息吹』

黒煙ハ魂ノ解放』

四肢は完全に凍り、胴体や顔に侵食していく。

『灰ハ灰トシテソノ魂ヨ』

炎炎ノ炎ニ帰セ』

完全に脳無が氷の中に閉じ込められた。

『ラートム』

最後、氷が水晶の結晶のように六角柱の形をとり、封印された。



『しつかりした奴、使わないと……。流石に、負担がくる……。な』  
「陸奥少女!!」

こうして敵連合によるUSJ襲撃事件は幕を閉じた。しかしこれがさらなる戦いへの呼び水になることを、この時はまだ知らなかった。

……………  
……………  
……………

「…知らない天井だ」

いつかは言ってみたい言葉がスルツと出てきた。……ん？なんで言ってみたかったんだっけ。というか何だっけ、それ？

ヤバいなー私の頭。思い出せよー…私はたしか、火災ゾーンから外に出ようとして――

「「「火賀梨ちゃん!!!」」」

「……んあ、みんなあ！おあよ〜」

『おあよ〜』じゃないよ！チカたち、すつごく心配したんだからね!!」  
「そうずらー!」

「もう、変な心配かけさせるんじゃないわよ」

「アハハ…みんなゴメ――」

「病室で騒ぐんじゃないよ！アンタも熱あるんだから横になってな」

怒られちゃった

「「「めんなさい……」」」

「……あーソレ、個性の副作用みたいなものです。食べた炎を体温という形で放出しているんですよ」

「そうなのかい。だとしても簡単に診察をさせてもらうよ。さ、用がない子は外に出た出た!」

〜少女治療中〜

「体温以外は悪いところはないみたいさね。あんまり無茶をするんじゃないよ、わかったかい？」

「はい、ありがとうございます！」

―同日、某所―

「ドクター、弔に渡した脳無が身体中から火を噴き出し燃えたらしい」

「なんだと!?!その脳無はどうしたのじゃ!!」

「弔が向こうに置いてきたらしい」

「チツ、……まあいい。これで計画が進む……!」

## EP other 日常編 猫ごっこ

今日は休日。学校からでた課題は終わったし、自主トレーニングも今日はお休みだし、やることないからAqoursでまったり過ごし  
てるんだけど…

やっぱ暇。すっごい暇。…あ、そうだ。

「ねえねえ、花丸ちゃん」

「なーに、火賀梨ちゃん」

「私、猫になれるかな？」

「ずらっ!？」

「いやさ、この前妖怪の凶鑑をみて、猫又や火車猫つてのが載っててさー。ホラ、私って炎を身体中にまわせるじゃない？猫耳や尻尾を炎で作れないかなーって思ってね」

「はあ…。やりたければやればいいと思うずら」

「…ちよつと辛辣すぎやしませんか？」

まあいいや。そうと決まったら行動しよう！とりあえず先生捕まえないと。

「と、いうわけで…ダイヤ先生お願いします！」

「事情は分かりましたが、何故私わたくしに？」

「それは…：…なんとなく？」

「そう、ですか…。まあ私も暇でしたし、お付き合いいたしますわ」

やったね、監督者ゲット！

あ、一応補足すると、Aqoursがある淡島はマリーちゃん  
の私有地で、Aqoursの先生はヒーロー免許を持つてるからね。許可された範囲でなら俺たちも個性を使えるってわけ。

早速やってみよう！

く少女準備中く

今の服装は白字のTシャツに黒のジーンズで、燃えてもあまり困らない服装。

それに前にハロウィーンで使ってた猫耳カチューシャとベルトで留めるタイプの猫しっぽ。

姿見鏡の前に立ってみただけど、うん。そこそこ似合ってるな、見た目は。

「すうー……。はあー……。よし」

イメージは固まった。昨日はたくさん寝たし、たくさん食べたから発火限界はなさそう。あとは気持ちの問題。カチューシャと尻尾を取っ払って……

「……猫又!!」

自分の中でのなかが解放された気がする。

側頭部から一对の三角耳が生えてる。ピコピコと動かせる。

尾骨のあたりからは赤色の細長い尻尾が二本生えてる。勿論これも一本ずつ動かせる。

「で、出来た……！デキチャツタヨオ!!」

くるくる回ってみる。ついでに生え際が変じゃないか確認。

「!!危ないっ!」

「……い、痛く……ない?——ツピヤア!!」

回りすぎて足がもつれたのか、俺の不注意ですべってこけた。これだけならドジ話で終わるはずだった。

自分が火傷するかもしれないのに、俺がケガしないようにダイヤモンドちゃんが下敷きになってくれた。本当に先生の鑑だ。

ただちよつとこの体勢はすぐに解くべきだよな。後ろから抱きしめられる形で——

「火賀梨さん、大丈夫ですか?」

「だ、大丈夫です!です、けど……けど、そのく、手を、どけてくれるとうれしいかな」と

「分かりましたわ。けど、何故ですか?」

「あの、ばつちり……ですね。私の、胸を……ワシ掴み……してるんです……」

／／

「!!」 シュバツ

——俺の胸をワシ掴んでいるから。

少女、お説教受教中

「あまり注意力を散漫にしてはいけませんよ」

「……はい。ごめんなさい」

「はい、これでお説教はおしまいですわ。ほら、もうお立ちなさい」

「ありがとうござ、あう——ひゃうっ！」

ダイヤちゃんに手を貸してもらって立ちあがった。そこまではいい。

足が痺れていたからか踏ん張りがきかなくて前によろけた。まあ、仕方ない。だがここからが問題だ。

炎の尻尾で衣服が燃えないようにウエスト幅が少し広めなジーンズを履いていて、衣服と肌の間に少しだけ隙間ができていた。そこに下にかけていたダイヤちゃんの手がすっぽりと、吸い込まれるように入っていた。

つまり、直におしりを触られたわけで。

「今度は、おしり……／＼／＼」

「す、すみません！」

その後もいろいろラッキースケベなことされた。

転びかけて、一緒にいた果南ちゃんともつれて、その際に胸を揉まれたり。

水まきしていたルビィと花丸ちゃんに水をぶっかけられて、服が透けたり。

着換えが終わってドアを開けたときに、丁度入れ違いに入ろうとしていた梨子ちゃんがドアノブ掴み損ねて、よろけて顔から胸にダイブしてきたり。

階段を降りてる最中にすべって、下にいた善子ちゃんの顔をおしりの下敷きにしたり。他にもあんなことやこんなことまで……。

ただ、下敷きにしたりされたりだったのに、一切ケガがなかったのは不幸中の幸いか……。

「疲れた……。飯前に少しだけ寝よ……。」

……

……

…

…

……

……

「ふあ〜〜あつくあ……あさ、か」

今日は休日。学校からの課題はないし、自主トレーニングは今日は午後からだし、やることないからA q o u r sの中でまったり過ごそ〜。

「なんだろ…変な夢見た気がする……」

「おはよう、火賀梨ちゃん」

「あ、マルちゃん。おあよ〜」

「ねえねえ。火賀梨ちゃん」

「なにいく、マルちゃん」

「火賀梨ちゃんって、猫になれるずら?」

「へ?」

「昨日、妖怪の凶鑑をみて猫又や火車猫がのついで……。火賀梨ちゃんは食べた炎を操れるずらよね?猫耳や尻尾を炎で再現できるのかなって思ったんずら」

「……考えておく」

「ずらあ♪」

—観測者—のノート\*陸奥 火賀梨 編

『このノートを読んでいるあなたは、陸奥 火賀梨（みちのく かがり）という女の子で、

あなたの個性は「火喰い」。周りの炎を吸収して操る、  
といった内容の個性を持っている。

この事を理解しているのであればここで読むのをやめなさい  
この事を理解したのならばこの続きを読みなさい

この事を理解できないのであれば落ち着いてからもう一度読み直  
しなさい

また、このノートは陸奥 火賀梨のみが読むことを勧める』

『このページを読んでいるということは、

あなたは陸奥 火賀梨ではなかったという事になる。

この事を理解したのならばこの続きを読みなさい

この事を理解できないのであれば読むのをやめなさい』

『このページまで読み進めたのであれば、あなたに真実を伝えましょ  
う。

ここの世界は前にあなたがいた世界と殆ど同じ世界。ただ、ほんの  
すこし、

誰かが、元の世界とは違う選択をした世界。シユレディングアの猫  
の

確定されなかった方の世界といってもいいかもしれませんね。

この世界は、ありえない力を持って生まれた子供が有り触れる程い  
る世界。

人口の8割が、そのありえない力を持つ者が占める世界。

そのありえない力を「個性」と呼んでいる世界。

そして「個性」を使って善行を行う人をヒーローと呼ぶ世界。

あなたの知っている話で例えると「僕のヒーローアカデミア」に近  
い世界になりますね。

「個性」の事を「異能」や「スキルとマイナス」と呼んでいる別の世界や、

ヒーローの事をハンターや異能者と呼ぶ世界もあるのですが、その話は置いておきましょう。』

『前のページであなたの個性を「火喰い」と記していたと思いますが、それは本当のあなたの個性ではありません。本当のあなたの個性は

「原初ノ炎（アドラバースト）」

他の炎を操り、自ら炎を生み出し操る個性。

あなたが知っている「炎炎ノ消防隊」の第1から第3能力者までの力は

全て使えるような個性になりますね。

自ら炎を生み出す場合は発火に体内の酸素を使用するため、

個性を使いすぎると酸欠状態になるから気をつけてくださいね。』

『この世界にあなたがいる理由ですが前の世界であなたは寝ている間に家が焼かれ、

あなたの体も一緒に焼けてしまったのですよ。そこであなたの意識は

無意識に自らと近い自分を探して乗り移ったのです。

本来であれば自分を自分たらしめている者、言うなれば同姓同名の身体に宿るのですが

あなたの場合ですと名の読みしか合っていないんですよ。

もしかしたらあなたには私の識りえない何かがあるのかもしれないね。』

『私が教えることができるのはここまで。後は自分で確かめて真実を識ってください。』

ただし、識りすぎると危険ですよ。

—観測者 モルガナ—』



## 松浦果南 誕生日

「今日はありがとう果南先生！」

「どういたしまして。そろそろ家に着くよー、捕まってるね」D u r r

r r r r

D u r r r r r r r r r r n ……

「ただいまー」

『……………』

「鞠莉く？ダイヤく？」

「梨子ちゃん、まるちゃん着いたよー」

『果南（先生）お誕生日おめでとう！』

（おー、驚いてる。これはドツキり成功だね）

なんでこうなってるかって？

これは今日の朝まで遡る

回想

A q o u r s に入ってから4日が過ぎた。そこで俺は今世最大の驚きをみせた。診せて、観せて、魅せた。勿論、見せただけ。流石に大声は出さなかったけどね

事の発端は朝（4:00）。いつもより早く起きてしまったが気にせずいつも通り島の浜辺を散策していると

??? 「アラ？良い子はまだ寝てる時間よ？」

「……………！」

鞠莉 「oh…そんなに構えなくていいわよ」

「鞠莉先生…」

「チヨットだけお話ししない？」

「実は火賀梨に伝えてない事があるの…」

「え？（伝えてない事…?)」

「実はね……………今日は果南の誕生日なの！」

「果南先生の?」

「そうよ! birthday partyをやるのよ!」

「そうなんですか」

「そう! それでね、火賀梨にやって欲しい事があるのよ」

俺にやって欲しい事ーそれは、果南の足止めらしい。

ということ、只今P. M2:00。果南ちゃんと沼津探訪して  
います

ー足止め1 深海水族館ー P. M2:00

「ここが深海水族館だよ、火賀梨ちゃん」

「しーらんす、がいるところだよね」

「そうだよ、行ってみる?」

「うん! しーらん、かんすう!」

シーラ! ((o(\*。▽。\*)o)) カンス!

ー足止め2 大瀬崎ー P. M5:00

「ここがおせぎき、なんだね果南先生」

「そう、大瀬崎。大体の人が おおせぎき、って呼んでるけどね。でも  
どうして大瀬に来たかったの?」

「え? えつと……」

(言えない…前世ですわわ達が大瀬崎で潜ってたから、なんて言え  
るわけがない)

「なんとなく来たくなつたのかなん?」

「!…うん。さっきの水族館に写真があつて、綺麗だったから」

「火賀梨ちゃんもあのポスター見たんだ。あの写真綺麗だよねー富士  
山もはつきり見えたし、神池の事もしっかり書いてあつたからね。:

どう? 実際に見たら」

「…: 凄くキレイ」

「もうちよつといる?」

「うん!」

―足止め3 びゅうおー P. M7:40

「夜の内浦が見たい」って言われたからココに来てみたけど…なんでびゅうお?」

「でいどりーむ!」

「?….:楽しそうだし、いっか」

「ギランツ!」

「ふふっ、善子のモノマネ?」

「嫉妬ファイヤー!」

「今度は鞠莉だ」

そして今はP. M8:10

淡島に戻るためにマリンバイクが停まってる浜辺に。さつき果南ちゃんがダイヤちゃんに電話をもらったらしく、「もう帰ってきなさい って怒られちゃった」だそうだ

「果南先生!」

「何?」

「えつとね、果南先生に渡したいものがあるの….:どうぞ!」

「….:これは、貝殻のブレスレット?どうしたの?」

「えつとね、浜辺で見つけた貝殻に穴を開けて紐を通したの。真ん中のピンクの石は今日の朝に見つけて付けたの」

「ありがと。でもいいの?火賀梨ちゃんが集めてつくたんじゃ?」

「うん。でもいいの、感謝の気持ちだから!」

「じゃあ、今着けよっか….:うん、私の腕にピッタリだ。よし、お家に帰ろうか!」

回想終了

その後、A q o u r sに着くなりすぐ果南ちゃんの誕生日パーティーが始まってどったんばったん大騒ぎ、ではなく普通に楽しく時間は過ぎていった

誕生日の歌を歌って

夕飯をたべて

ケーキ食べて

プレゼント渡して（俺のプレゼントは手紙、今日はありがとうって  
のどこからよろしくってのを書いておいた）

お風呂入って

寝た

明日もいい日になりますように

## 国木田花丸 誕生日

「どうしよう、ルビイ先生…」

「どうしよつか火賀梨ちゃん…」

今は3/3のP・M・15:00。二人が一緒になつて悩んでる理由。それは…

「花丸ちゃんの誕生日プレゼントが決まらない！」

…3/4の花丸ちゃんの誕生日に渡すものが思いつかないのです。そもそも何故二人で悩んでいるかというと、A q o u r sのメンバーの誕生日を祝う時は二人一組のペアをつくつて誕生日プレゼントを考えるかららしい。ペアは毎回、誕生日の一週間前にくじで決めていたが、今回から俺を含め9人(三人一組の計三組)で誕生日プレゼントを考えることになった。今回のペアは

火賀梨、ルビイ、ダイヤ

千歌、鞠莉、曜

梨子、果南、善子

となった。

…ダイヤちゃんとは悩まないのかつて？ダイヤちゃんが一緒に悩まないのは「私が考えたプレゼントより、いつもそばにいるルビイと火賀梨さんが考えたプレゼントの方が花丸さんも喜ぶでしょう？値段のことは気にせず花丸さんに相応しいプレゼントを考えなさい」だそうだ。

(花丸ちゃんって本が好きってイメージしかないんだけど…)

「花丸ちゃんの好きなものをあげたいよね」

「うん。ルビイ先生ははなまるちゃんが好きなもの知ってるの？」

「んー…本、かなあ？火賀梨ちゃんはなんだと思う？」

「うーん……本？」

「だよねえ。それじゃあどんな本がいいのかなあ？」

………

………

………

「…それで、何かいいプレゼントは思いつきましたか？」

「……………」

「決まってるのですね…」

P. M. 19:00。ダイヤちゃんに呼ばれてルビィちゃんと事務室に来た。呼ばれた理由はもちろん誕生日プレゼントのこと。全っ然定まってるない。

「とりあえず、どんな案が出たのか教えてくれませんか？」

「はなまるちゃんは本を読むのが好きかなって思っ、本をあげようかなって」

「それでどんな本が喜ばれるかなあ　なんて考えてたけど…全然思いつかなくて」

「本がいっぱいありすぎてどんな本を読んでもいいのかわかんないの」  
「…………なるほど。でしたら『植物図鑑』はどうでしょう？」

「植物図鑑?…」

「はい。そろそろ皆さんに個性の特訓をしようと思っ、いたところ、です。花丸さんの趣味は読書なのでしょう?であれば特訓と趣味を両立できる植物図鑑が最適では、と考えてみましたか?…どうですか？」

「……………」

「どうしたのですか？」

「…す、すごい?ダイヤ先生!!?」

「流石お姉ちゃん!!?」

「フツッこの私にかかればお茶の子さいさいですわ♪プレゼントも決まったことだし、私は買い物に出かけてきますわ。プレゼント用にほかに何か必要なものはありますか？」

「ルビィはないかな?火賀梨ちゃんは?」

「うーんと、可愛くておつきな布!」

「布ですか?…わかりましたわ。では二人とも、少しの間待っ、いてくださいな」

「はーい」

……………

……………

(よし、これで作戦完了)

「ねえ火賀梨ちゃん、なんで布が必要なの？」

「えーとね、本だけじゃ可愛くないかなって」

「うゆ？どういうこと？」

「せっかくのプレゼントだから、本を可愛くしようかなって！図鑑って可愛くないから」

「そっか！布のブックカバーを作るんだね♪…確かに図鑑だけだと勉強ドリルを渡された感じがしてルビイも嫌かな。でもブックカバーってよく知ってたね？」

「うん？ブックカバーって何かはわからないけど本を可愛くしたいし、汚れないように守ってあげようって思ったの」

「…よし！そうしたらルビイと一緒にブックカバー作り頑張ルビイしよっ！ルビイ、裁縫は得意なんだ♪火賀梨ちゃんはデコレーションをお願いしてもいい？」

「いいよっー」

……………

……………

……………

そして3/4、花丸ちゃんの誕生日会。なんとかブックカバーを前日までに仕上げる事ができた。ブックカバーはある程度の大きさ(ライトノベルから児童書まで)を包めるように設計し、乱丁や落丁を防止するためのベルトをつけた。いつも持ち運べるようにと過度なデコレーションはせず、精々ベルト留めのボタンがピンクのハートの石ぐらい。ダイヤちゃんが買ってきた図鑑はいかにも図鑑ってかんじの本ではなくて、作ったブックカバーで包めるぐらいの、身近な植物や野菜のことが書かれた本をチョイスしていた。

「花丸ちゃん(さん)、お誕生日おめでとう(ございます)♪」

「ありがとう♪かがりちゃん、ルビイ先生、ダイヤ先生。プレゼント開けてもいいはずら？」

「いいよっー！気に入ってくれるかな？」

「ずらっ？…………本ずら！いろんな草とか花が書かれてるずらく♪本も

可愛くなってる！ありがとうずらー！」

「どういたしまして、花丸ちゃん♪その本についてる布は『ブックカバー』って言って、本が汚れないようにするものだよ。取り外してほかの本に着けることもできるんだ〜」

「すごいずらー！未来ずら〜♪とつても大事にするねっ！」

……………

「ブックカバーをつくって一緒に渡すのは良い考えですねルビィ」

「うん！火賀梨ちゃんが本を可愛くしたいって言ったから思いついたんだ♪」

「…そういえば、火賀梨さんが布を買ってきてほしって言ってましたもんね。火賀梨さんはこのことを考えていらしたのですか？」

「ううん、布を凶鑑に貼ろうと考えていたみたいだよ」

「そうだったのですか…とにかく花丸さんだ喜んでくれてよかったですな」

「うん！」